

平成 23 年度（2011 年度）第 2 回運営委員会記録

豊中市教育センター

日時 平成 24 年（2012 年）2 月 9 日（木）
会場 豊中市教育センター 教科領域研究室
出席者 福田委員長、寺本委員、黒田委員、佐渡委員、藤原委員、楢原委員、高祖委員、宮本委員、北尾委員、井坂委員、猪原委員
欠席者 青柳副委員長、酒井委員、津田委員、越桐委員、石橋委員
事務局 鈴木所長、大屋チーム長、野村チーム長、成瀬グループ長、田中グループ長（記録：寺田、井関）
傍聴者 1 名

1. 開会の挨拶（委員長）

豊中市は来年度中核市になる。来年度から、豊能地区として全国初の人事権の移譲が行われ、また中学校においては新教育課程が完全実施になるということもあり、いろいろと変革のある節目の年となる。この運営委員会で来年度の方針と今年の成果とを確認し、何をどう変えていけばいいのかをご指示・ご提案いただきたい。それを次の年度の指針としたいと考えているので、忌憚なきご意見を頂戴したい。

2. 案件

■平成 23 年度（2011 年）度の事業中間報告

○教育センター全般

- ・中核市への移行・教職員の人事権の移譲にかかわっての豊能地区 3 市 2 町による研修の検討
- ・科学のまちとよなかの推進（総合博物館長賞・サイエンスフェスティバル・南部陽一郎賞）
- ・確かな学びを豊かな学びへ

○研究・研修グループ

- ・豊中市研究協力員制度（教科・領域にかかる研究）
- ・確かな学び推進事業（福井市への研究視察）
- ・教職員の研修について

○情報・科学グループ

- ・校内 LAN 機器（小学校 11 校・中学校 4 校）の更新
- ・教育センターサーバーの更新
- ・ICT 支援員の配置、運用について
- ・不要薬品の廃棄処分について
- ・第 57 回理科展の運営、表彰、作品発表会、大阪大学総合学術博物館長賞、待兼山賞について
- ・理科自由研究相談会について
- ・サイエンスツアーについて
- ・サイエンスフェスティバル、南部陽一郎賞について
- ・サイエンスカフェについて

○教育相談チーム

- ・教育相談（平日）、サタデー相談、発達相談、専門医相談の実施
- ・教育相談総合窓口における相談状況
- ・学校への支援（巡回相談・ジュニアメイト派遣・小学校への教育相談員派遣・サポート会議）
- ・研修業務（教育相談研修・学校園等研修）
- ・学校とのケース会議について

○支援教育チーム

- ・学級設置準備について
- ・医療的ケアに関すること
- ・障害児就学相談の実施
- ・障害児教育・支援教育の研修に関すること
- ・巡回相談について

【質疑・意見】

- ・教育委員会の研修の参加人数 3466 人とあるが、このうち教育センター主催の研修の参加人数の割合はどれくらいか。

→センター実施分は 2500 人程度です。

- ・かなりの人数で参加者が年々増えてきていることは結構である。ただ、研修の成果が実際の学校の実践に活かしているかどうか重要である。また、先生方の反応も気になる。研修後にアンケート調査等は実施しているのか。

→研修ごとに、終わったら必ずアンケート調査をしてご意見・感想をいただいている。

- ・良い感想ばかりであるか。

→中には厳しい意見・感想もある。

- ・それを報告していただいた上で、どういう研修がいいかディスカッションして次年度に活かすべきである。厳しい意見や感想をもっと報告してほしい。良い数字ばかりが提示されてもアドバイスのしようがない。

- ・節目の年でもあり、変わっていかなければならないという豊中市であるからこそ、そういったものを汲み上げてもらいたい。次回より、そういった意見を添えたデータを提出し、審議できるようにしてもらいたい。

■次年度にむけて

- ・研修について
- ・費用対効果について
- ・市実施研修の回数について

- ・豊中市教育研究大会について
- ・確かな学び推進事業について
- ・科学のまちとよなか推進事業について
- ・教育相談員の派遣について
- ・医療的ケアの状況について

【質疑・意見】

・福井市や京都市への学校見学の計画、これは良い試みである。見学に行くことで、豊中の学校を変える一つの機会にしてもらいたい。「学校を丸ごと変える」意識を育てることに意味がある。一例として、福井市立至民中学校なら問題解決学習、京都市立下京渉成小学校なら言語活動の充実を中心に、積極的に取り組んでいる。「他市に学ぶ」とするなら、学ぶのは学校である。今こそ、研修センターの研修からシフトし、学校を丸ごと変える機会を提供すべきである。

・教師が個人で他校を見に行き、学校を変えるのは難しいであろう。プロジェクトを組んで変えていくことが大切であろう。

・教育相談をセンターで行っていて、更にカウンセラーを学校に派遣するのはたいへんであろう。人手も足りない中でそこまでやる必要があるのか。教育相談のカウンセラーの資質向上を目指すことを優先にすべきではないか。カウンセラーの資質や能力が高まることで、豊中市にとって大きな利益になる。

→今年度15校にカウンセラーを派遣している。中学校にはスクールカウンセラーの配置があるが、小学校にはない。様々な視点で子どもの見方をアドバイスしてもらえ、派遣はたいへん有効であったという意見もある。来年度については必要な学校に絞った実施をと考えている。また、相談担当の職員の資質向上を大切に、研修を実施しており、今後もその方向性を大切に考えている。

・小学校の現場はたいへん多忙である。学校から出かけて行くのも難しく、カウンセラーが学校現場に来てくれて相談できるというのはありがたい。

・カウンセラーが限界を超えてしまわないように業務を取捨選択して、緊急性の高いところを重点的に支援するのはどうか。また、専門性を持って、ケースに合わせた派遣ができるようにしてはどうか。

・専門性を育てるために、研究会や学会に行き最新の知識を学んでほしい。カウンセラーとして、心理学の分野での専門性を身につけた職員を大切に育成してほしい。

・ケース会議実施時、少年文化館や教育センターから相談員を派遣してもらい、助言をもらえると、会議の視点が明確になる。子ども把握の方策を知り、次のステップの解決策を示してもらうことで課題が見えてくる。そういう視点を授けられることが学校にとってはありがたい。学校の助けとなるので、今後も続けてほしいと考える。

・問題は多岐に渡っており、専門的な知識が必要な事案が増えてきている。そういうことも踏まえて研修や派遣業務もお願いしたい。非常に高度な要求になるであろうが、今後も続けていただきたい。

- ・豊中市はこれまでも障害のある子どもたちの通常学級での支援体制づくりや教育内容の充実を進めてきた。今後もインクルーシブ教育を目指す方向性のなかで、ユニバーサルな授業をどう方向づけていくのか。

→医療の支援を受けて地域で生活していき、将来的には地域で社会参加・自立するというのが教育としての目標となる。そういったことを目指して医療的ケアを受ける子どもを支援し、また様々な配慮を要する子どもについても同様に考えて取り組んでいる。

- ・支援教育のあり方・概念が変わってきている。社会的にも法整備がなされていく途中である。我々として何をしなければならないのか、下支えにどんな準備をしなければならないのかということが問われているのだと思う。目の前にいる子どもがありのままの姿で学校生活を送ることができるように取り組んでもらいたい。これはどんなに時代が変わろうとも不変である。

- ・センターからの報告が羅列で、専門の人間でないと理解が難しい。これでどうだったから、来年どうするというのが分かるように、内容と説明を連動させて報告してもらいたい。

→今日のこの場は、中間報告および次年度に向けてのご意見を頂戴する場である。今後の方向性については、時間的な制限もあり、主なものをということで示した。ご指摘の点について、次年度に活かし、センター事業に反映させたい。

- ・次年度より、そのようにわかりやすい報告をしてもらえればと思う。また、厳しい意見・批判と思われることもご報告いただき実りある審議ができるよう、資料等の工夫もお願いしたい。

3. 閉会の挨拶（委員長）

今日、審議されたことについては是非、来年度にいかしていただきたい。より良き豊中の教育のために、一助になればと思っている。教職員の資質向上は、当然、豊中の教育にたいへんな影響力を持つ。現場には、若い教職員がたくさん増えてきている。研修にもどんどん出かけ、いろいろなことを学び、またベテランの教師と交流していく中で新たな発見をしてくれることは、学校にとって良い刺激になると感じている。今日の貴重なご意見を受け、学校が変わっていくためにぜひとも工夫し、尽力いただきたい。